

Title	地域の開放と持続可能性をめざしたエコツーリズムの管理について
Author(s)	敷田, 麻実; 森重, 昌之; 末永, 聡
Citation	日本観光研究学会全国大会研究発表論文集, 17: 319-320
Issue Date	2002-12
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16794
Rights	本著作物は日本観光研究学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Institute of Tourism Research. Copyright (C) 2002 日本観光研究学会. 敷田麻実, 森重昌之, 末永聡, 第17回日本観光研究学会全国大会研究発表論文集, 2002, pp.319-320.
Description	

地域の開放と持続可能性をめざしたエコツーリズムの管理について

Ecotourism Management Aiming at Openness and Sustainability of a Region

敷田 麻実^{*1} 森重 昌之^{*2} 末永 聡^{*3}
SHIKIDA Asami MORISHIGE Masayuki SUENAGA Satoshi

一般に、地域外からのエコツーリストの受入は地域の自然環境や社会にとって負担が増えると考えられているが、本研究ではエコツーリストの受入と、地域の自然環境や生態系の持続可能な利用の両立を実現するエコツーリズムの管理モデル(敷田・森重・末永のCONPサーキットモデル)を提案した。このモデルでは、地域内外のエコツーリストや関係者が持つ知識に注目し、その知識をネットワークの形成によって活用し、そこから社会的学習によって新たな管理ルールが生み出されることを想定している。

キーワード：エコツーリズム管理、エコシステムマネジメント、アダプティブ・マネジメント、ナレッジマネジメント

1. はじめに

エコツーリズムは1980年代後半から注目され始めた新しいタイプの観光である。エコツーリズムにはさまざまな定義があるが、「自然環境に与える負荷を最小限にしながらそれを体験し、観光の目的地である地元に対して何らかの利益や貢献のある観光」と考えることができる¹⁾。エコツーリズムには自然環境の保全機能があり、従来から問題のあったマストツーリズムを代替することによって、観光地の自然環境の持続可能な利用が可能であるとする主張には無理がある。それは、①たとえ個々のエコツーリズムの負荷は小さくても、それが集積すれば大きな影響を与える、②エコツーリズムが成功すればするほど参入者や来訪者が増加し、その規模が拡大する傾向にある、③観光客が通過者となりがちであるマストツーリズムとは異なり、エコツーリズムは観光地の自然環境や地域社会に深く浸透し、影響がある場合にはより深刻になるからである。

このような問題はあるが、優れた自然環境や生態系に対する観光客の需要は高く、エコツーリズムは今後も拡大すると思われる。また、エコツーリズムは地域の自然環境や生態系の保全に対するインセンティブ効果などの優れた特性を備えており、地域外からのエコツーリストの受入自体に問題があるとする考えは早計であろう。そこで、観光地の自然環境や生態系に配慮する注意深い管理

をした上でエコツーリズムを実施し、影響の緩和を図らなければならない。

そこで本研究では、エコツーリストの受入は地域にとって負荷でしかないというモデルに代わって、エコツーリストの受入と、地域の自然環境や生態系の持続可能な利用の両立を実現するエコツーリズム管理モデルを提案した。

2. エコツーリズムの管理のポイント

エコツーリズムによる観光地への影響を緩和するためには、エコツーリズムの管理が必要であるが、それがどのように実現・継続できるかを明らかにしておく必要がある。その際にポイントとなるのは、次の4点である。第1に、エコツーリズムも観光の一形態であり、地域外からのエコツーリストの来訪が前提である。第2に、エコツアーの対象となる自然環境や生態系は常に変化しているので、順応的(adaptive)な管理が必要である。第3に、その自然環境や生態系に関する管理者の知識は不完全であり、学習が常に求められる。第4に、社会経済の状況、自然環境や生態系に対する価値認識が変わると、エコツーリストの利用も変化するので、管理も変化を迫られる。

地域外からのエコツーリストの来訪が、自然環境や生態系に与える影響は、さまざまな要因の相乗効果や負荷の蓄積などから、その予測は困難を極める。さらに「旅の恥はかきすて」型のエコツー

*1 金沢工業大学 環境システム工学科

*2 パシフィックコンサルタンツ株式会社 新事業開発本部

*3 北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科博士後期課程

リストであれば、それらに与える影響は計り知れない。逆に、自然環境や生態系への関心が高く、知識の豊富なエコツーリストが来訪すれば、ある意味で地域社会の良きモニターとなる可能性もあり、排除だけが得策ではない。

また、順応的な管理の実施のためには、自然環境や生態系に関する知識を増やし、それらの状態についての連続的・意図的な「学習」が必要になる。そして変化する相手に対して最適な管理を実施するためには、一定の管理を固守するのではなく、状況に応じて新たな管理を創出していくような柔軟な対応、すなわち「連続した知識創造」が必要になるであろう。このような連続的な知識の創造プロセスは、最近「ナレッジ・マネジメント」²⁾として注目されている。

このような管理を進めるのではなく、エコツーリストを排除しようとすることも想定されるが、優れた自然環境や生態系に対する需要は高く、実質的に排除は難しいと思われる。

さらに、自然環境や生態系の管理を地域独自で進めてしまうと、地域の共同体内部だけに通用する「暗黙知」的なルールや規準が先行しがちで、仮にそれらをエコツーリストに適用すれば、違反や離反が起こると思われる。それでも無理に進めようとするれば、結果的に管理の不徹底につながり、観光地の自然環境と地域社会に悪影響を与える。そこで、誰にでも理解可能なユニバーサルなルール、すなわち「形式知」化することが必要になる。

また敷田・森重は、地域にとってエコツーリズムとマストツーリズムの違いは、地域で「完成品」をつくるか、「部品」を外部に提供するかであるとしているが³⁾、完成品をつくるためには地域が自律的に観光をデザインし、観光に必要な自然環境や生態系を管理しながら、エコツアーを組み立てる必要がある。

結局、「地域の生態系や社会の開放と持続可能性の追求」の二兎を追う必要があることから、エコツーリストを取り込んで、オープンでありながら自律的なエコツーリズムの管理を維持することが必要であると考えられる。

3. エコツーリズムの管理モデルの提案

このような考え方に立つとき、これまでの前提であった「エコツーリストの増加は地域環境への負荷につながるので、エコツーリズムの規制を進める」というモデルを再検討する必要性がある。そこで、これに代わるモデルとして、筆者らは次

のようなエコツーリズムのサーキットモデルを提案したい。

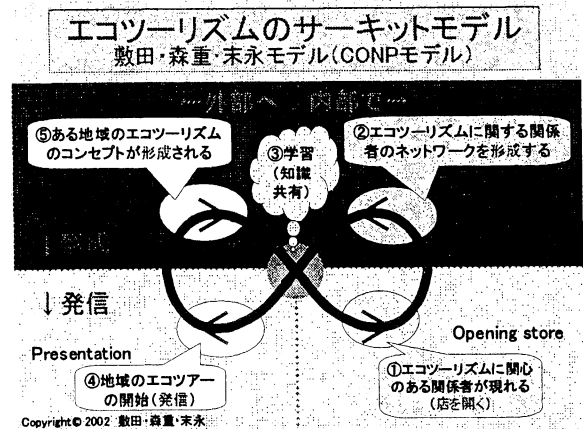


図-1 エコツーリズムのサーキットモデル

まず図-1の右下のように、エコツーリズムに関心のある関係者やエコツーリストが現れる(ここでは、「店を開く」と呼ぶ、①の段階)。そしてエコツーリスト同士、また地域の関係者とのネットワークによって、彼らの知識が共有され、学習が進む(②から③の段階)。その結果、より生態系や地域社会に配慮したエコツアーが生み出され(④の段階)、それが外部から評価・正当化されることで、具体的なコンセプトになる(⑤の段階)。次に、「優れたエコツーリズムを提供している」というコンセプトに魅きつけられた(コンセプトに賛同した)新たなエコツーリストがそこへ集まり、知恵を加えながら、次のサイクルに入っていく(①に戻る)。このサイクルを繰り返せば、自然環境や生態系を開放しながら、持続可能性も追求するしくみをつくることができるのではないか。

以上、優れたエコツーリズムを創出しようと考えている地域にとって、このサーキットモデルが政策立案のモデルとなることを期待したい。

【参考文献】

- 敷田麻実・森重昌之(2001a)：観光の一形態としてのエコツーリズムとその特性、(石森秀三・真板昭夫編「エコツーリズムの総合的研究(国立民族学博物館調査報告、23)」、国立民族学博物館)、pp.83-100
- 野中郁次郎・梅本勝博(2001)：知識管理から知識経営へ：ナレッジ・マネジメントの最新動向、人工知能学会誌、16(1)、pp.4-14
- 敷田麻実・森重昌之(2001b)：エコツーリズムによる地域の持続的発展の可能性：石川県白山麓のケーススタディから見た「環境に優しい観光」の未来、環境経済・政策学会年報、6、pp.200-215